「存在の男」展〈関口存男と演劇〉寄稿

演出家・関口存男
新劇の水脈としての踏路社

（2）

関口 純

ちなみに踏路社の上演記録を以下に挙げると、

第1回私演
大正6年（1917年）2月17日、18日　午後6時開演　牛込芸術倶楽部
長与善郎作「画家とその弟子」
舞台監督　黒田次雄（関口存男）

第2回私演
大正6年（1917年）5月5日、6日　午後7時開演　牛込芸術倶楽部
武者小路実篤作「悪夢」
舞台監督　木村修吉郎

第3回私演
大正6年（1917年）9月22日、23日　午後6時開演　牛込芸術倶楽部
フランク・ヴェデキント作「春の目ざめ」野上臼川訳
舞台監督　青山杉作（小屋の場面：関口存男）　演技監督　岸田辰弥

第4回私演
大正6年（1917年）12月4日　午後6時開演　牛込芸術倶楽部
ヘッベル作「マリア・マグダレーナ」吹田順助訳
舞台監督　青山杉作

第5回私演
大正7年（1918年）4月21日、22日　午後6時開演　牛込芸術倶楽部
ヘンリック・イプセン作「幽霊」森鴎外訳
舞台監督　関口存男

実は、正式にはこの5回の公演をもってその幕を閉じてしまった。その理由には、青山杉作と村田實の芸術性の違い、村田實の恋愛沙汰、度々出演していた某女優の陰謀、メンバー（存男も含めた）の経済的理由等、様々な要因が考えられるが、まあ、いつの時代でも仲間同士で始めた劇団、バンドは遅かれ早かれ……。

さて、このたった5回の公演にも拘らず、どうして踏路社は新劇の水脈とされるのか。実際のところ、新劇史に於いて踏路社が語られるのは「画家とその弟子」「春のめざめ」「幽霊」の3作だけである。このうち2作品が存男の演出である。また「春のめざめ」に関する記述は、ほぼ、存男による野上豊一郎への誤訳指摘である。そしてこの縁から野上に誘われ、数年後、存男は法政大学で教鞭をとる事になるのだ。ちょっと不謹慎なバイト（?）のドイツ語教師誕生である。丁度この時期、存男は法政の学生たち相手に「一生の仕事として芝居をやりたい、独逸語はそれまでの食いつなぎだ」（『関口存男の生涯と業績』）と話している。まだ演劇への夢は絶たれていなかったのである。野上は能の研究者としても知られ、現在、野上記念法政大学能楽研究所としてその名が刻まれている。踏路社の定期会員にもなってくれたという。

「画家とその弟子」については長田の劇評等が示す通りである。「幽霊」に関しては、後の築地小劇場演出家・土方与志が青山杉作（牧師マンデルス役）の名演とともにその感動を伝えている。ちなみに、私が修行時代に演出助手としてお世話になった劇作・演出家の津上忠氏（2014年に90歳で亡くなられた）は土方与志の弟子であり、「若い頃、あなたのお爺さん（曽祖父）に土方のお使いで会ったことがあるよ」と伺ったことがある。ちなみに存男は、若き土方が演出した柳原白蓮作「指鬘外道」（本来、村田實の演出だったが、映画のロケで忙しい村田に代わり、演出助手の土方が演出を務めた）に役者として出演していたこともある。土方は踏路社のファンでもあり、「この劇団は私にとって忘れることの出来ないものだ。ここに集った芸術家達の演劇に対する良心的な態度、リアルな演技の追求、アンサンブルのとれた上演に対して、若い私は心から敬意を感じた」（『青山杉作』）と書き残している。まさにこれこそ踏路社が新劇の水脈とされる所以である。土方自身、特に「幽霊」には大きく影響を受けたと言う。後に自身が「幽霊」を演出する際、牧師マンデルス役に青山杉作をキャスティングしようとしたが、松竹から青山杉作ではネームバリューがないからという理由で、当時売れていた俳優を無理矢理押し付けられてしまう。そのことも一因となり、土方は日本の劇界を去ってヨーロッパへ旅立ってしまう。土方はこうも書いている「（松竹は）『踏路社』の仕事にも、青山氏にも無智（原文ママ）であり、あるいはそれらは問題にもしていなかったのであろう。私の再三、再四の要求にも拘らず、東儀鉄笛氏を無理矢理に押し付けて」（津上忠『評伝 演出家 土方与志』新日本出版社、2014）と。既にこの時点で新劇の芸術（至上主義とまでは言わないものの）精神と商業主義との乖離が見られる。言うまでもなく存男にとっての演劇は前者の立場である。

後に、劇団新東京で上演された「フィガロの結婚」の翻訳に対し、その娯楽性から「作者（延いては芸術への）への冒涜だ」とも非難されたこともある存男だが、彼にとって「観客を楽しませる」ということと「商業主義」とは別物なのである。その辺りの価値観は後のドイツ語教本にも生かされている様に思われる。それはさておきこの「幽霊」、興奮した観客が楽屋に押し寄せてくるぐらい大成功の公演だった様で、存男も日記に「評判も非常によかった」と記している。

やはり、踏路社の成功と関口演出はどうやら切り離せそうもない。

存男の日記には、自ら、自身の演劇もしくは文学的才能を認める記述が残されているが、母・久美子によれば「自分のことを天才だと思ったら男は結婚しちゃあいけない」と存男は言っていたという。もちろん、これは一般論として言っていたのかもしれないが、自身に重ね合わせている様にも思われる。だが私には、それはドイツ語のそれではなく、演劇、文学への眼差し、「if」の物語へと思いを馳せていた様に思われるのだ。

関口 純（せきぐち じゅん）
劇作・演出・作曲家。楽劇座芸術監督。公益社団法人・日本演劇協会会員。
関口存男の曾孫であり、「存在の男」展では監修を務める。
http://junsekiguchi.net/